説であると伝えられている。今日の実証的な史学の立場からは、神武天皇はその実在性を疑問視されているが、それはそれとして、伊勢本神社は創立以来六百余年、畑野浦の氏神として人々に崇敬されているわけである。

富沢氏の説明によると、南北朝の時代に、菊池氏の一族が畑野浦に来住して、当地の開拓の鍬を担ったという。更に時代が下って関ヶ原の役後、西軍に属して滅亡した四国の長宗我部の一族戸高氏が、畑野浦に上陸して定着した。戸高氏のことは時代も新しく、戸高姓の家が沢山あり、その宗家とされる家もあることから事実であろう。

菊池氏のことは立証出来ないが、伊勢本神社の創立された応安元年（北朝の年号）は、南北朝時代長慶天皇の第一年であって、菊池武光が活躍した時代である。応安元年から五年前の貞治二年（北朝）には菊池武光は、大友氏第八代氏時を鳥屋城に敗って之を斬っている。はっきりしたことは分らないが、菊池軍が豊後各地に動いたことは、十分に考えられることであって、その一族が畑野浦に定住したことも、あり得ることである。

畑野浦の至る所に散在する五輪塔は、こうした歴史を背景とするものであって、数百年間に活動した代表的人物の墳墓であろう。塩月善五郎氏所持の石斧や、富高辰平治氏所蔵の「秋葉山六雄」現のたての彫りなども見せていただいたが、これも今日の大きな収穫であった。

かくて予定の見学を終え、三時半のバスで帰途についた。終日好天に恵まれたが、畑野浦の海は夕陽にかがやいて、のたりのたりと波うっていた。

今この稿を終るに当って、参加会員と共に、終日御案内下さった富沢氏をはじめ、畑野浦史談会員の方々、ならびに親切な御接待にあずかった龍剣流道師、松木藤作神官に、深甚な謝意を表する次第である。

（おわり）

レポート

源六原に土器を拾う

建国記念の日・直川史談会と合同で

（羽柴　弘記）

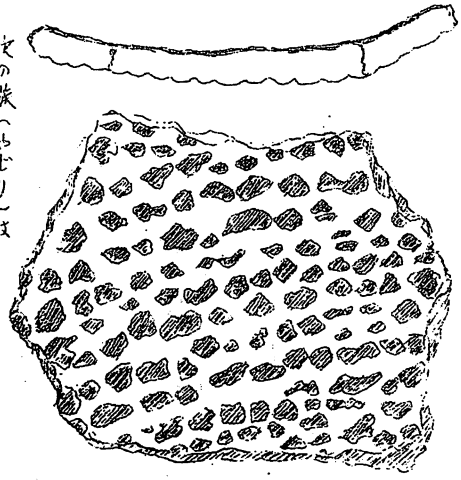
二月十一日　月曜　昔は紀元節と称して、小学校では「雲にそびゆる高千穂の――」と歌って、神武天皇の創業を偲んだものであるが、今日ちがう。建国記念日として官庁や学校は休み、家には申わけのように国旗が出しているが、しかしやはりチラホラである。

私どもは直川の史談会と一しょになり、先住の人々の生活遺跡をさがそうということになり、直川村上直見、久米徳川の古屋台地、源六原に出かけた。朝のうち少し白いものがちらついたが、まもなく天気は折合って、明るい日ざしとなり、良とんど寒さを覚えない。

午前九時半、直川の史談会六名、佐伯から七名、出会うて見るといい人数となり、和気あいあい、数町歩もあろう広い源六原の台地で思い思いの土器拾いである。幸い一番よく出るという中央部の栗林は、鍬を入れて深々と耕してある。手に手にスコップや豆鍬を手にして、汗千斛さながらてんでに掘り出しては、土器や石器の破片をブラ下げたビニールの袋にむさめる。

この栗林は果樹園として造成、よく耕しているので、今急にこの表土に土器を求めても、見つからないのが当り前、それにはかかわらずみんなが土器や石器の細片を数個づつ拾い上げた。

私はまず次のような土器の破片を拾った。



注の鍬（やじり）は

柳井雅雄氏の拾ったもの。古下の部分を欠いてしまったので、捨てたものであろうか。

この外明らかに来櫛如だと思われる破片や、縄文式心弥生式土器かと考えられる土器片も数多く、それぞれ多数採集された。

古代もかなりさかのぼった時代、まだ焼畑文化の発達しなかった頃、この台地に何人かの人々が住みついていたことが考えられる。当時はまだ耕すことを考えるとせず、毎日谷をわたり、丘を越えて終日鳥や獣を追うて歩き、日暮れには獲物を肩にしては家族に配えられていた。女や子供も楽んでいたかった。木の実を拾い、草の実を集め、粉にしたり乾したりして貯えることもしていた。即ち竪穴住居の生活、それも極めて素朴なものであったにちがいない。この源六原は、その住居跡で

あった。私はみんなと共にこの源六原の土を踏って、自らその土の中から何千年の昔の人々の生活の一片にふれて、この丘の人々の生活を、わが伴侶のように受けとめることが出来て、心がおどる思いであった。

源六原は長い間、古代人の生活の場であった。だから欠けた鏃はポイと捨てられ、こわれた壺は破片の草むらに放り出される。それが長い生活で集積され、風雪と共に土の中に埋もり、その後しだいに農耕の時代と移り、はるか大陸から高度の文化が流行して来て歴史時代を迎えて今日とはなった。そしてこのように今日は、スコップの先に眼を迎のようにして土器の破片を求めている次第である。

この源六原のような女、原住民族が狩猟生活を事としていたと思われ、縄文土器や石の鏃が出土する低い山地、広い丘陵はあちこちに多い。番匠川流域、堅田川流域、宇目町のあちこち、考古学を愛好する人々によって調査され、多数の出土品を採集して愛蔵している。私も今日をきっかけとして、一人でいいからあちこち探って見ようと、意欲の湧きおこるものがあった。

一通り終ったので谷間に下り、珍らしい洞穴を探った。降き十米位の凝灰岩の自然洞穴を、いつの頃だれかによって掘り広められていたもの、これは一体何の目的のものか。防空壕ではない。キリシタン関係と推理位飛躍したが、高さが一米四〇位、中が一米位の細長い洞穴である。覚えておこう。

（注）（二ページ下段に見取図記事あり）

正午、久留須に引揚げた一行は、昼食を共にして談笑のうち氏おわかれしたが、午後は更に休石氏に誘われて、竹の下部落外れの樹林の中の古墳をしらべ、お別れした後も、道趣や下直見の丘陵地帯を何か所も歩き、番匠からは小田の台地にのぼって歩いてまわった。しかしやうやう柳の下にどじようは居らず、殆んど何物も加えることは出来なかった。まあくたびれだけが残ったと言えるが、とにかくも楽しい一日であった。

歌句を得た、御笑覧までに。

土器拾う源六原は春めきて

大衆勢奥新宇の墓の落葉かな

佐伯史談会

昭和四十九年度（一月～十二月）

研修事業計画予定表

① 現地研修―（奇数月第四日曜、年間六回）

△ 源六原に土器を拾う（二月）

○ 丘間ヶ岳に登る（一月）

○ 宇戸洞穴を探る（五月―サイクリング）

△ 冠岳に登る・旅畑農業について学ぶ（四月）

○ 沖ノ黒島を探る（日豊海岸国定公園）

（七月　―米水洋、鋼野浦合同）

○ 八戸高原を歩く（五月十九日歩こう会に合流）

△ 鶴見崎探勝（八月　船で）

○ 国東の仏教文化と訪仏る（十一月三、四日）

西国東を主にまわる、一泊二日バスの旅

② 相互学習会・訪問研修

○ 古文書学習会（年間三回）

○ 古老に話をきく会

○ 神社祭礼、盆行事等の見学会

○ 公共施設・工場等の見学会

○ 物故会員の追悼集会

③ 其の他

○ 市民史跡めぐりの主催

○ 市民サイクリングの主催

○ 市民方るこう会への参加

○ 「佐伯史談」の寄贈

④ 機関誌「佐伯史談」の発行

一、三、五月と隔月発行　計三回

七～十二月は毎月発行　計六回

十二月号で第百号とする予定で努力。

⑤ 研究用図書、文献コピー、地図コピー等の世話をすること、

昨年につづいて、次々とお世話する。これまで「佐伯志」や「古文書解読字典」を取りついだように。

今、次の二種を受付け中。ハガキ又は電話で申し込まれたい。

大分合同新聞　連載

「豊後大友物語」　残部少数あり、至急申し込み下さい。すぐ届ける。（三、〇〇〇円）

佐伯市史（四月発行）一冊三、五〇〇円

史談会員は、本会扱いでお届けする。佐伯地方の歴史に限らず、佐伯市を中核とし大南海部郡全域にわたる、佐伯地方理解の何よりの手引書、発行されたら早速お届けする。

申込先　佐伯史談会事務所　羽柴方

はがき又は電話（佐伯三―四四一二番）

値段がはるようであるが一、〇〇〇ページを越す大冊。内容は平易を旨とし、写真、図版六〇〇枚、十二人の執筆者二年有半の努力による力作。遠方の方は小包郵便です。

⑥ 地域社会へのサービス

史談会は、ただ会員だけの研究交換に満足しません。近くで市内諸団体や、部内八か町村に出向き、史跡の調査や文化財の発掘、観光資源の開発、宣伝に協力する構えをもっている。ご遠慮なく御連絡下さい。

このようにしています。御活用下さい。